

Title	東晉政權の成立過程：司馬睿(元帝)の府僚を中心として
Author(s)	金, 民壽
Citation	東洋史研究 (1989), 48(2): 262-299
Issue Date	1989-09-30
URL	http://dx.doi.org/10.14989/154274
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

東晉政權の成立過程

——司馬睿（元帝）の府僚を中心として——

金 民 壽

はじめに

一 琅邪王睿の渡江前夜の江南

二 東晉の成立過程と琅邪王睿の府僚

1 安東將軍・都督揚州江南諸軍事府

2 鎮東大將軍・督揚江湘交廣五州諸軍事府

3 丞相・大都督府

三 東晉の成立と王敦の亂

おわりに

はじめに

南朝貴族制の特徴は、豪族の家格と官僚制が或る種の關係を持っており、士庶の區分が嚴存していた、ということである。その南朝貴族制の端緒を開いたのが、東晉の成立である。

八王の亂から永嘉の亂へと續く華北に於ける大混亂の中から、華北の貴族層は、固有の地盤を離れ、江南へ流寓したにもかかわらず、江南豪族の上に、彼ら中心の貴族支配體制を再生させる。どうして流寓貴族が土着豪族の上に立つ東晉政

權が成立することができたのか。その理由について、早くから疑問が出され、検討されてきた。この問題を最初に研究されたのが、岡崎文夫氏である。氏によると、江東の首望である顧榮は、北方から波動してくる混亂の狀勢を如何にして防止すべきかを中心として政策をたて、彼がはじめ江東で擧兵した寒人の陳敏の力を利用したのも、後に晉室を奉戴するに至ったのも、そのためであつた、と論ずる。⁽¹⁾

しかし、孫吳政權が滅亡した後、期待を持って洛陽に出かけた江南豪族たちは、華北の士人社會にいられず、慘めな敗北感を味わねばならなかつた。中原で陸機兄弟が悲運な最期をとげた後、北方朝廷に志を絶つて故郷に歸つていた江南豪族にとって、華北貴族の江南人に對する非情さは周知のものであつた。故に宮崎市定氏は「中原の混亂がもう少しながびけば、そのうちに吳人の中にも自立運動をくわだてる者が出てきたにちがいない。ところが事實は、そんな動きの起ころぬうち、晉の一族、司馬睿にひきいられた中原の貴族の一團が、軍隊を引きつれて南下してきたのである」とされ⁽²⁾る。このように江南豪族の東晉政權への對應について、江南社會を安定させる爲の協力であつた、という説もあり、軍勢力を前にしたやむを得ぬ屈服であつた、という説もある。

さて、この問題について本格的に取り組み、精細な分析を行ったのが、川勝義雄氏である。氏は、渡江初期の元帝側の軍勢力は實はゼロに近かつた、といわれる。軍勢力を持たない北來亡命貴族たちが、自分達をどうしてそのように優位におく支配體制を再生させることができたのか、その理由を次のように述べられる。孫吳が滅亡した後の江南には、屯田體制の束縛から解放された農民による社會的流動現象が起こる。その上さらに、華北の動亂による社會的流動の大波がおしよせた。その流動現象が激化するにつれ、江南豪族は江南社會を安定させるための政治權力が必要となり、元帝を推戴するに至る。しかし、その結果、江南豪族は北來亡命貴族の下位に置かれることになった。その原因は、社會的流動現象の激化が大土地所有者たる江南豪族を土地經營者と政治家との兩面に引き裂いて、どちらにも效果的に對應せしめ得なかつたこと、江南豪族に連帶性が缺如していたこと、また最も有力な原因として、自立農民の未成熟な江南における後進的開

發領主傾向が、華北貴族のもたらした先進的郷論主義體制のまゝに屈服したこと、⁽³⁾に求められている。氏は主に華北と江南との社會的隔差、軍事力の分析から論證されている。

しかし、このような研究の成果にもかかわらず、東晉政權の成立過程の全容は、あまりはつきり浮かび上がってこない。その理由は、元帝を中心とした建康政府の政治狀況が十分に論じ盡くされていないからであると思う。その實狀にもっと接近する一つの試みとして、本稿では、琅邪王・司馬睿(元帝)の幕下に仕えた府僚を中心として分析してみたい。六朝の新王朝は、すべて創業主である府主によって辟召された府僚を中核として成立していた。故に府僚の構成の中には、その府が抱えている様々な問題があらわれているはずである。琅邪王の府僚については、すでに矢野主税氏の論考があるけれども、それは琅邪王が建康に府を開いて以來の全府僚を一括して論じているので、漠然とした印象を免れ難い。⁽⁴⁾

琅邪王は、西晉の實權者である東海王越によって、三〇七年七月安東將軍・都督揚州江南諸軍事に任命され、はじめて建康に府を開いた。のち越の死後、懷帝によって、三一年五月鎮東大將軍・督揚江湘交廣五州諸軍事に昇進されるが、翌月洛陽は陷落する。その後、懷帝が平陽で殺されると、愍帝が長安で即位し、琅邪王は更に三一年五月左丞相から、のち丞相に命じられる。三一年十一月長安も落ちると、三一年には晉王に、さらに三一年には皇帝の位に即ぎ、そこで正式に東晉が樹立される。このような東晉の成立過程は、琅邪王の幕府が三〇七年安東將軍府↓三一年鎮東大將軍府↓三一年(左)丞相府へと擴大されていく過程であるとも言える。琅邪王の肩書の昇進は、當時の緊迫した華北の狀況と密接な關係があり、それによって琅邪王を取り巻く狀況も變わってきたと豫測される。従来、こうした綿密な分析がないままに、東晉の成立過程及び南・北人の關係について論じてきたので、かえってこの時代の理解を妨げている嫌疑があった。したがって、わたくしは、元帝の府僚を、安東將軍府・鎮東大將軍府・丞相府に分けて分析し、それを通じて建康政府を巡る政治狀況の動きを追いながら、東晉王朝が成立するまでの過程をあきらかにしていこうと思う。それによって、江南に東晉政權が成立しえた理由を考えてみたい。それが本稿の目的である。

一 琅邪王睿の渡江前夜の江南

二八〇年、寛厚の政といわれた西晉の治下に置かれた江南の社會は、基本的には舊吳とそう變わらなかつたろう。

その江南に、三〇一年早くも八王の亂の波が寄せ来る。⁽⁵⁾趙王倫派の揚州刺史の郝隆は、三王起義の一人である齊王冏の檄に應ぜず、形勢を觀望しようとしたために、別駕の吳郡の顧彥とともに、その方針に不滿を持つ將士の手に斃れる。⁽⁶⁾三王起義後、實權を掌握した成都王穎は、江東の首望である陸機兄弟を誅殺し衆望を失う。その成都王穎に對して、東海王越らが惠帝を奉じて舉兵するが、蕩陰の戰で敗れる。なお惠帝は長安の河閒王顒のもとに拉致される。

止め處なく擴がる一方の八王の亂は、敗戦後、歸藩を餘儀なくされた東海王越の三〇五年七月の山東軍舉兵によつて、全中國を巻き込む。その東海王越に、皇帝を奉還するために兵を舉げるように勧めたのが、吳國富春の孫惠であつた。⁽⁷⁾その案に従つて、越は江東豪族を招く。惠帝の西遷後、すでに歸郷していた顧榮をはじめ、戴若思や華譚を軍諮祭酒として、また甘卓や薛兼を參軍として辟召する。⁽⁸⁾

尙書倉部令史（八品）の廬江の陳敏は、三王起義の兵が長く京師に駐屯し倉庫が空虚になると、腐るほど餘っている江南の米穀をもつて中州を救うことを建議し、漕運を擔當する合肥度支となる。その後三〇四年、江南における初の流賊の亂である張昌・石冰の亂徒が長江流域の五州を荒し回つた時、陳敏は運兵を率いて亂を鎮壓し、その手柄によつてさらに廣陵相へ昇進する。東海王越は、この幹能に長けた陳敏を右將軍・前鋒都督となし、兵を要請する。⁽⁹⁾

東海王越は、江東の兵とともに、幽・徐・青・冀・豫州の都督・刺史らと連合し、山東軍の盟主となり、西へ向かうが、その年八月第一戰で敗北を喫する。東海王越が自派の范陽王虓を豫州刺史に任用したことに對して、もと豫州刺史の劉喬が、それは天子の命に非ずと言ひ立て、河閒王顒の後援を受けて、豫州で兵を發したためである。

豫州の歸屬をめぐる大接戰で、中原の混亂極まり無きを見た陳敏は、ついに江南へ歸り、三〇五年十二月、晉朝に反旗

をひるがえし、江南に割據する。陳敏は、同じ頃歸郷中の江南の武將甘卓と共謀し、自ら楚公と稱する。江南豪族の顧榮ら並びに江東の首望は悉く陳敏の官爵を受ける。⁽¹⁰⁾その陳敏が、ある時江東豪族を疑い、一變して豪族誅滅の暴舉を敢行せんとする。その際、顧榮は陳敏に「中國は喪亂し、胡夷は内侮す。太傅（當時、東海王越は司空である。恐らく三〇四年太傅に命じられたが、固辭したのを呼び名しているのだから）筆者註を觀るに、今日復た華夏に振う能わず。百姓は復た遺種無し。⁽¹¹⁾……若し能く君子に委信し、各おの懷を盡くすを得、萑芥の恨を散じ、讒諂の口を塞がば、則ち大事圖る可きなり」と説く。その言説から、彼らの最大の關心が東海王越にあったことが窺われる。この時、江東豪族はできれば陳敏をもりたて、江東に割據政權を樹立したい意があつたにちがいない。

ところが、その東海王越が范陽王虓の司馬・劉琨の活躍によって、三〇六年六月、惠帝を洛陽に奉還し、實權を一手に握ることに成功する。

かかる中原の情勢下で、東海王越の軍諮祭酒・廬江内史である廣陵の華譚は、「倉部令史、七第頑穴、六品下才」に過ぎない逆賊陳敏に協力している顧榮ら江東豪族の非を、遠近に露擧してあばく。その書の中に「皇興東軒し、行は紫館に即く。百僚は纓を垂れ、鳳闕に雲翔し、廟勝の謨、潜かに帷幄に運らす。……威、丹楊に震い、寇を建鄴に擒えれば、而ち諸賢何顔にして中州の士に見えるや」とあり、東海王越によって、皇帝が長安より閑もなく洛陽に着くことが描寫されている。その頃、陳敏の遠略無きを危懼していた顧榮は、その手紙を受取つて慚色あり、陳敏とともに縦横の計を圖っていた甘卓に「若し江東の事、濟る可くんば、當に共に之を成す可し。然れども卿、事の勢いを觀るに、當に濟るべきの理有りや不や。敏は既に常才にして、本より大略なし。……其の敗るるや必せり。而るに吾等、安然として其の官祿を受く。事敗るるの日、江西の諸軍をして首を函して洛に送り、題して逆賊顧榮・甘卓の首と曰わしめば、豈に惟に一身顛覆するのみならんや。辱、萬世に及ばん。之を圖らざる可けんや（『晉書』卷六八顧榮傳）。

と諭した。こうして甘卓が寝返り、江東豪族らは都督征東大將軍の劉準と協力して、三〇七年三月、自らの手で陳敏を葬

る。その間、東海王越に非協力的であつたと見える劉準は都督を罷免され、そのあと周馥が襲う。又多くの州鎮も東海王越の一派に交替される。

さて、ここで振り返つて顧榮の言つた「事の勢い」、即ち江東豪族をして割據政權を諦めさせた要因とは何であつたかを考えてみよう。それは「陳敏の大略無き」とこと、更に重要なこととして東海王越が豫想外に西晉政局を掌握したことによるのではなからうか。その實權の掌握とともに江南を鎮壓する爲に來る軍隊を恐れたのであろう。それこそが、洛陽の東海王越とつながる「江西の諸軍」であつたと考える。しかし、東海王越の實權掌握も、もはや八王の亂から永嘉の亂の局面に變つた政局を收拾するには手遅れであつた。それを知らぬまま、陳敏の亂後、西晉政府から侍中と尙書郎に徴せられ、洛陽へ向かつた顧榮と紀瞻は、中原の混亂の甚だしきを見、徐州の彭城までいつて逃げ戻つた。

以上の如く、陳敏の亂は、江南の社會流動現象の激化が根本的原因ではあろうが、發生から鎮壓まで、東海王越による舉兵と序盤戰の失敗、それに東の間の政局收拾と深く關つてゐた。繰り返していえば、江東に割據した陳敏の亂を江東豪族が自ら鎮壓してしまつたことについては、東海王越が皇帝を洛陽に奉還し八王の亂を收拾したことに對し、それを過大評價した江東豪族の政局判斷の誤りが大きく作用した、と見る方が自然な解釋ではなからうか。つまり當時の江南は、中原の情勢に深く關わり、それに連動してゐた。この狀況を見落としてはなるまい。

二 東晉の成立過程と琅邪王睿の府僚

1 安東將軍・都督揚州江南諸軍事府

【永嘉元年（三〇七）七月—永嘉五年（三一二）四月】

陳敏の亂が討平された後、三〇七年七月、琅邪王睿は西晉の實權を握つた東海王越より、安東將軍・都督揚州江南諸軍

事に任命され、その年九月に江南の腹部である建鄴に鎮する。そこで東晉王朝の第一歩が築かれる。

琅邪王睿は宣帝の曾孫にあたり、當時の皇帝からはだいぶ疎遠な関係になっていた。八王の亂中、彼は封國が同じ徐州である東海王越のもとで活躍した。三〇四年越に従い成都王穎の討伐に出たが、蕩陰の役で敗北し、穎側の嚴重な警戒を脱し、琅邪に歸った。その後、東海王越の河間王顒に對する山東軍舉兵の際には、平東將軍・監徐州諸軍事として越の留守役を務めるなど、一貫して忠實な越の心膂として行動している。この時、彼が任命された都督揚州江南諸軍事は、都督揚州諸軍事・周馥の管轄下にある江南を割いて設けられたものである。故に琅邪王と壽春に鎮している周馥との兩者の關係は甚だ微妙なものであった。

ところが、琅邪王は都督揚州に任命されたが、しばらく下邳に留まり治所を相談する。その時、建鄴に鎮することを唱えたのが、琅邪の王曠（王羲之の父）である。彼はもと丹楊太守であったが、陳敏の亂に逐われて江淮地域にいた。その江南の事情にある程度詳しかったと思われる王曠や王導らの議に従い、琅邪王らは舊吳の都の建鄴にのりこんでくる。

當時、惠帝に代わり新皇帝になった懷帝は、親政とともに東海王越より政柄の奪還を圖る。周馥はその兩者の政争に深く關わり懷帝に忠誠を盡くすが、一方、琅邪王は司馬の王導の計に従い、専ら江東の治に力を注ぐ。その琅邪王の安東將軍府に參加した府僚が次の【表一】である。⁽¹⁵⁾

【表一】安東將軍・都督揚州江南諸軍事府（307・7—311・4）

北人					南人				
職名	人名	出身地	備考	典拠	人名	出身地	備考	典拠	
軍司					顧榮	吳郡吳縣	加散騎常侍（3品）	『晉書』卷68	
長史	裴邵	河東聞喜	『三國志』には裴邵に作る	『晉書』卷35 『三國志』卷23					

司馬	王	導琅邪臨沂	「元帝作鎮江左，……帝以爲司馬，頻守廬江・鄱陽二郡，豫討周馥（310・11）」	『晉書』卷65 『晉書』卷76					
軍路祭酒	王	敦琅邪臨沂	(309・3)揚州刺史のち尚書(不就)。(310・3)軍路祭酒	『晉書』卷98 賀	循	會稽山陰	兼吳國內史。元帝紀に參佐に作るが，『世說新語考異』敦胤注により軍路祭酒(不就)	『晉書』卷68と卷6元帝紀 『世說新語考異』	
				紀薛陸	瞻丹楊秣陵 兼丹楊陸	楊祭酒		『晉書』卷68 『晉書』卷68 『晉書』卷77	
從事中郎	卞	壹濟陰冤句	廣陵相より	『晉書』卷70					
參軍	阮孚 孔衍 夏侯承 類	陳留尉氏 魯國 燕縣 琅邪臨沂	記室參軍 夏侯承の外兄は王眞 夏侯承の參軍(306・8)……元帝初鎮下邳(305年平東將軍任命後，暫く下邳に鎮した307・7のこと)，復命爲參軍，過江(307・9)以含爲上虞令(會稽郡)」	『晉書』卷49張 『晉書』卷91孔 『晉書』卷55任 『晉書』卷88計	閻愉 會稽山陰 旭臨海章安 副丹楊句容	楊(不就) (不就) 「淳和美懿，州郡所稱，爲晉元帝安東參軍，又征北參軍帶下邳太守。後爲寧朔將軍與孔坦討沈充，……」	『眞書』卷20 眞胄世譜	『晉書』卷76 『晉書』卷78 『晉書』卷94	
掾屬					周張	義興陽羨 會稽	倉曹屬のち建威將軍吳興太守「元帝時爲掾屬」安東府？	『晉書』卷58 『晉書』卷78	
主簿	諸葛	琅邪陽都	のち江寧令(丹陽郡)へ	『晉書』卷77					
舍人	劉超	琅邪臨沂	專掌文檄	『晉書』卷70					

勿論、この表は幕僚の一部分に過ぎない不完全なものではあるが、安東府の幕僚のうち重要な人物はほぼ網羅しているはずである。現存の史料によって、できる限りその幕僚を復元し、ほかの記述と相補いながら、その時代を考究してみよう。

さて、琅邪王は「建康に徙鎮するに及び、吳人附かず、居ること月餘なるも、士庶至る者有る無し⁽¹⁶⁾」という状況であった。いったい、當時琅邪王に従ってきた北人はどのような人々であったのか、それから見ていこう。

まず、府僚の長である長史の裴邵は、琅邪の王氏と雙壁をなす魏晉の盛族河東の裴氏である。彼は東海王越の裴妃の兄であり、越の腹心である。彼はまもなく太子中庶子となり、洛陽へ轉任する。

次の司馬は、長史に下ること一位ではあるが、戦亂の際には、吏を掌る長史の役割は薄くなり、將を掌る司馬の任務が最も重要になる⁽¹⁷⁾。故に、もと東海王越の參軍であつた司馬の王導は、琅邪王の謀主として軍謀密策のすべてに預る。王導は、琅邪王とかねてから親しく、琅邪王が洛陽に居た時は、常に封國に歸るように勧めていた。西晉の滅亡を見抜いて、ひそかに興復の志があつた彼は、江東の人心收攬策を進言し、中興第一の功臣になる。また王導の従弟の廩は文武の資を備え、彼も東海王越のもとで活躍したが、南渡して琅邪王の司馬となり、のち周馥を討伐するなど軍事作戰に参加している。次の軍諮祭酒と從事中郎は後述する。

その次の參軍には、參軍曹の中で最も清なる記室參軍の孔衍（孔子の二世孫）をはじめ、⁽¹⁸⁾ 儒素篤行で名高い琅邪の顔含（顔之推の九世祖）、放達浮華派の阮孚（阮籍の從孫）などが見える。彼らは主に文官參軍である。

最後に、主簿と文書擔當の舍人（九品の寒士の官）は、府主の門下で祕書の役割をするもので、府主に最も親近な職である。⁽¹⁹⁾ 主簿の諸葛恢は王・葛と呼ばれた琅邪の名族で、琅邪の臨沂令から渡江した。また舍人の琅邪の劉超は、二代に亘つて琅邪國に仕えたもので、のち中書舍人になる。

以上、渡江初期に琅邪王に従ってきた安東府の佐僚は、司馬の王導と王廩、參軍の顔含、主簿の諸葛恢、舍人の劉超

ら、おもに自分の封國である琅邪國の人材を中心として構成されていた。それについて少し時代は下るが、次のように見える。

時に王氏は將軍と爲り、而して（諸葛）恢兄弟及び顔含並びに顧要在居り、劉超は忠謹を以て書命を掌る。時人以えらく、帝、善く一國の才を任ずと（『晉書』卷七七諸葛恢傳）。

彼ら琅邪の人々は、琅邪王や當時の琅邪太守であった許歸と共に南渡した一千餘戸の一部であろう。⁽²⁰⁾琅邪國の者を中心としたこのような府僚の構成は、琅邪王の軍隊の場合にもそう變わらなかつたと推測される。その多くない琅邪國の軍隊を率いたのが、郭逸と宋典である。郭逸については知ることができないが、宋典は蕩陰の役で琅邪王を奇知で助けた従者として記されている。⁽²¹⁾そのことから「琅邪王の軍隊が禁衛隊の性格を大きく出るものでない」ことが推し量れる。⁽²²⁾したがって、名論も猶輕く、府の軍隊も微弱な府主である琅邪王は、渡江の初め長い閑南人に無視されたのであろう。

ところが、たまたま「威風すでに振る」つた王敦が來朝し、三月上巳、帝は親しく褰を觀、肩輿に乗り、威儀を具え、（王）敦や（王）導及び諸名勝が皆騎從したので、江南の望である紀瞻・顧榮らは、その斯くの如きを見、皆驚懼し、道左に拜した。王導はそれによつて、江南人士の招致が急務であることを進言し、自ら顧榮と賀循の所に至る。そして、その二人が命に應ずるや、吳・會は風靡して百姓は心を歸したといふ。⁽²³⁾その賓禮を以て召された南人の安東府に於ける位置を、次に探つてみよう。

まず、軍司（五品）に、江南の首望である吳郡の顧榮が散騎常侍（三品官待遇）を加えて任命される。軍司が軍師と同じものであれば、軍師はすでに後漢初め頃からみえる。しかし晉代の軍司は、從來の單なる軍事作戰上の指揮官とは異なり、府の全軍を監督する司法的監察の職で、府主に次ぐ高秩重望者が任命される要職であり、六品の長史・司馬より上位である。⁽²⁴⁾顧榮は琅邪王に「凡そ謀畫する所、皆以て諮らる。榮、既に南州の望士、躬は右職に處し、朝野甚だ之を推敬」した、とある。また彼は江南の人の推舉にも力を盡くした。

次の軍諮祭酒は、後漢末建安三年曹操が始めて公府に置いた職である。もともと祭酒とは、年長者が集會の際に酒杯をあげて祭事を行った慣例から出た官名で、漢の侍中、魏の散騎常侍のうち、功の高い長者が任じられた官である。軍諮祭酒は諮議祭酒・諮議參軍とも稱され、南朝では諮議參軍と統一される。この職は中央政府の侍中のように諷議を司り、一定の職掌はないが、その位は甚だ高いものであった。⁽²⁵⁾ 例えば、後の四品官の刺史領兵者の王敦と周顒、宗室の南渡者がすべて鎮東府のこの職に就くことから、この官位の高さは計られるであろう。軍諮祭酒に、吳・會稽・丹楊の望族である賀循・紀瞻・薛兼・陸曄が招聘される。彼ら賀循・紀瞻・薛兼と軍司の顧榮は「齊名」⁽²⁶⁾である。その四人と吳郡の望族である陸曄を、琅邪王はそれぞれ軍司と軍諮祭酒に任命し、優遇して北人の上に置いたのである。

賀循は、顧榮の没後、軍諮祭酒に續いて鎮東府の軍司に任命されるが、ついに就かず、琅邪王の即位後、始めて太常となり、當世の儒宗として尊ばれた。紀瞻はのち鎮東府の長史となり、その後は薛兼が丞相府の長史となり、陸曄は中興後に侍中となる。彼らは終始一貫東晉政權側から優遇されたし、彼らも東晉政權に忠節を盡くした。彼らについては『晉書』卷六八の史臣曰くの條に「顧・紀・賀・薛等並びに南金東箭にして、世胄高門たり。霸朝に委質し、邦政に豫聞し、典憲其の刊輯に資り、帷幄其の謀猷を付[※]つ。望は縉紳に重く、任は惟れ元凱たり。官成り名立ち、國を光やかし家を榮かす」とあるように、琅邪王は彼らの持つ德望と學識、即ち文人的資質に全面的に頼って、江南を治めていった。

次の參軍・掾屬に、丹楊の張闔と許副、義興の周玘、會稽の孔愉と張茂が任命される。まず丹楊の人士より見ると、張闔は後漢末南下した北方の名族・張昭の曾孫である。彼の載せられている『晉書』卷七六は文武の才を兼ね備えた者の傳で、丹楊の張氏、會稽の虞氏、吳郡の顧氏らは、すべて東晉初期の戰亂に郷里の義兵を率いて朝廷を助けた一族である。又『眞誥』の神降ろしの主催者である丹楊・許謐の父・副ものち王敦の亂の際、義軍を起こして建康政府を支援する。⁽²⁷⁾

義興（吳興）の周氏は「今江東之豪、周・沈より強きもの莫し」と言われた江南最強の豪族である。周玘は、西晉末の江南の混亂に常に首唱して義兵を率いて戦い、江南の寧謐を保った最高の功勞者であった。特に、三一〇年の吳興の武將

錢瑒が起こした謀反は、琅邪王が渡江して直面した最初の軍事的な危機であった。その際「兵少なきを以て未だ敢えて前ま」なかつた琅邪王の軍の爲に、周玘は郷里の義衆を率いて戦い、錢瑒の反亂軍を撃滅する。琅邪王は周玘の功を讃え、彼の郷里を中心に義興郡を特設する。そのほか、會稽の名族の孔愉は「稼穡讀書を以て務となし、信は郷里に著われ」た人であるが、隱逸傳に載る臨海の任旭と共に安東府の辟召には應じなかつた。會稽の賀循や孔愉、臨海の任旭らが、丹楊・吳郡・吳興の豪族とは違って、琅邪王の初期の辟召に應じなかつたのは、長江流域からだいぶ離れているという地域的な要因が大きく作用しているのだろう。

以上、安東府の南人參軍と掾屬は、辟召に應じなかつた者のほかは、おおむね武將として大いに活躍した人々である。彼ら以外にも數多くの武將——特に丹楊の武將甘卓など——が安東府の幕下に仕えたのは想像にかたくない。要するに、琅邪王の安東府は、江南の中心地に食い込み、その地の名族を北人幕僚の上に優遇することによって、彼らの持つ江南における名望に負い、江南にその基盤を築いた。なお武力も主に江南の武強豪族の積極的な協力に依存していた。この時期の江南豪族は、まさに「琅邪王をもちたてることによって、自分たちの主導する政權に仕立てようと努力した」⁽²⁸⁾のであろう。

さて、當時の華北は匈奴・羯の攻撃で、すでに救う道なく、あまつさえ懷帝と東海王越との仲は悪化の一途をたどり、又各々の州鎮は自らの勢力確保に腐心する。その最中、壽春の周馥は懷帝に遷都を進言する。ところが、東海王越を通さず直接上疏したので、東海王越は三一年一月琅邪王に周馥の討伐を命ずる。その命を受けた琅邪王は、丹楊の甘卓と將軍の郭逸をさしむける。周馥の死によって、琅邪王の都督揚州の地位は確固たるものになる。

一方、華北の混亂に伴い、北人が江南地域に避難し、地方官に任命される例も多くなる。特に琅邪の王氏は、清談の領袖である王衍が選舉を掌っていたので、一族の王敦は青州刺史から揚州刺史に、王澄は三〇七年十一月荊州刺史になる。

先の王曠は淮南太守に、王廙は廬江・鄱陽太守に、王廙の弟の彬は揚州刺史・劉機の建武長史となる。王導を中心とした琅邪の王氏一族は、もとより晉王朝の再興を目指し、琅邪王をもちたて、琅邪王の江南政權の確立に、一族を擧げて助力

した。彼らは自ら政治の最前線で活躍し、政治に強い意欲をみせている。實に東晉王朝は琅邪の王氏の力添えで成立したといっても言い過ぎではなからう。そのほか、廣陵相の下壺は安東府從事中郎に招かれてゐるし、庾琛（庾亮の父）は會稽太守となり、また桓彝（桓溫の父）は浚遼令（淮南郡）となり、それぞれ琅邪王に款附する。

以上の如く、琅邪王睿の安東府は、東海王越の忠實な出先機關として、琅邪國の人、特に琅邪の王氏を中心とする若干の佐僚を率いて南渡し、江南の中心地に府を開いた。その府に、すでに西晉下で形成されている郷論に従い、多くの江東豪族を名輩によつて格差づけ、第一グループは軍司・軍諮祭酒として優遇して北人の上に置き、第二グループは參軍・掾屬として幕下に入れることによつて、江東鎮守に成功したのである。言つてみれば、以上に見てきた琅邪王の安東府開府期は、江南の人々が優位を占める時期であつた。この時、安東府の多くの南人に圍まれていた琅邪王と、江南の代表的な人物である顧榮との次の對話は、その時の状況をよく物語っている。

元帝の始めて江を過ぐるや、顧驃騎（顧榮）に謂いて曰く「人の國土に寄り、心に常に慙を懷く」。榮は跪きて對えて曰く「臣聞くならく、王者は天下を以て家と爲すと。是を以て耿・亳は定處無く、九鼎は洛邑に遷る。願わくは陛下、遷都を以て念と爲すこと勿れ」（『世說新語』言語篇）。

このように琅邪王の推戴に積極的であつた顧榮が、早くも三十二年南人の哀惜のうち亡くなる。その顧榮がのち南人から手厳しい非難を受ける。南齊の吳興の丘靈鞠は驃騎將軍に任命されると、

（丘）靈鞠、武位を樂たがわず、人に謂いて曰く「我、應に東に還り、顧榮の家を掘るべし。江南の地方數千里、士子風流、皆此の中に出づ。顧榮、忽に諸伯渡を引き、我が輩の塗轍を妨ぐ。死して餘罪有り」（『南齊書』卷五二文學丘靈鞠傳）。

とある。かくして南人が北人によつて抑えられてゆく過程を、次に考察する。

2 鎮東大將軍・督揚江湘交廣五州諸軍事府

【永嘉五年（三二二）五月—建興元年（三二三）四月】

永嘉五年三月、琅邪王睿の後楯であった東海王越が歿する。「朝賢素望、名將勁卒」を悉く己の府に充し、「不臣の迹、四海の知る所」⁽²⁹⁾であった東海王越が、懷帝との反目深く、石勒討伐の出征中、憂懼のうちに亡くなる。その年五月、懷帝は琅邪王を鎮東大將軍・督揚江湘交廣五州諸軍事に昇進させ、勢力の盛り返しを圖るが、六月洛陽は匈奴に落ち、懷帝は平陽へ移される。

その東海王越の下にいた士人と洛陽貴族らが續々と琅邪王を頼って江を渡ってきたので、琅邪王の鎮東府はまさに北來人士の辟召期になる。「中州の士女、亂を江左に避くる者十に六・七」⁽³⁰⁾と言う状況下で、すべての政策を立案したのは、司馬の王導である。彼はさらに琅邪王に北人の賢人君子を收め、これらとともに事を圖るよう勧める。その鎮東府の府僚が次の【表2】である。

先ず、軍諮祭酒より見ると、宗室の司馬祐と司馬承がこの職に就く。貴族としては、錚錚たる祕書郎（六品）起家の汝南の周顗が、東海王越の子である鎮軍將軍・毗の幕下から南渡して重用される。また諸王文學（七品）起家の刁協も軍諮祭酒になり、のち鎮東長史となる。彼らについては後で詳述する。そのほか、竹林七賢とその後裔である放達浮華の徒の傳『晉書』卷四九に載せられているものについてみると、安東府の參軍・阮孚と鎮東府の參軍・羊曼に續いて、寒門の胡母輔之が軍諮祭酒になる。のちに、その胡母輔之のもとに身を寄せた縣の小吏であった光逸さえも軍諮祭酒になる。それは、わずか何年かの間に、建康の鎮東府に於いて清談派が確固不拔の地位を築いたことを物語っている。はじめ、安東府で南人を優遇する爲に用いられた軍諮祭酒は、後來の北人によって、その構成員が一變する。それも浮華派が幕府の中樞を占める。

【表2】鎮東大將軍・督揚江湖交廣五州諸軍事府（311・5—313・4）*（名前）は琅邪王の府に既に委質した者

北人				南人				
職名	人名	出身地	備考	典拠	人名	出身地	備考	典拠
軍司					(賀循)	會稽山陰	安東軍諮祭酒より(不就)	『晉書』卷68
長史	(刁協)	渤海饒安	鎮東軍諮祭酒より	『晉書』卷69(紀略)	丹陽秣陵	安東軍諮祭酒より。312年石勒戦、のち會稽内史へ	『晉書』卷68	
司馬	(王導)	琅邪臨沂	安東司馬より。のち312年輔國將軍丹楊太守へ	『晉書』卷65	戴若思	廣陵	鎮東右司馬	『晉書』卷69
軍諮祭酒	(王廙)	琅邪臨沂	安東司馬より	『晉書』卷76				
	周顒	汝南安成	「東海王越子毗爲鎮軍將軍、以顒爲長史。元帝初鎮江左、請爲軍諮祭酒」とあるが、卷60閔鼎傳と『通鑑』(311・12)によると、洛陽陷落(311・6)後、建康に着く。のち荊州刺史へ	『晉書』卷69 『晉書』卷60 『通鑑』卷87	華譚	廣陵江都		『晉書』卷52 『三國志』卷64孫綝傳
	刁協	渤海饒安	のち鎮東長史へ	『晉書』卷69				
	胡毋輔之	泰山奉高	「(東海王)越又以爲右司馬……。越薨(311・3)、避亂渡江、元帝以爲安東將軍諮議祭酒」とあるが、前後關係から鎮東府に置く	『晉書』卷49				
	光	樂安	(不就)	『晉書』卷49				
	卞	琅邪陰冠句		『晉書』卷70				
	王恢	東萊曲城	『北堂書鈔』卷48晉起居注によると、司空王基の孫	『晉書』卷58				

從事中郎	司馬祐河内溫縣	懷帝紀に永嘉五年(311)「二月、汝南王祐奔建鄴」とある	『晉書』卷59 と卷5懷帝紀				
	司馬承河内溫縣	(宗室) か、暫く鎮東府に置く 「喻山簡卒(312)、進至武昌。 元帝初鎮揚州、承歸建康、補 軍諮祭酒(鎮東府)」	『晉書』卷37				
	(丕)璽濟陰冤句	安東從事中郎より。掌選舉 「避亂渡江、元帝以爲從事中郎」とあるが、安東府は從事中郎が一人程度なので鎮東府に置く 「甚見優禮」	『晉書』卷70 『晉書』卷69				
王傳袁	承敷北地泥陽	『太平御覽』卷263應淳與州將陵に「陳國有袁琇……」	『晉書』卷75 『晉書』卷47 『晉書』卷71 陳顓傳				
	(諸葛恢)段邪陽都	安東主簿、鎮東參軍より。記室擔當	『晉書』卷77				
	王彬琅邪臨沂	揚州刺史劉微の建武長史より鎮東散曹參軍のち鎮東典兵參軍	『晉書』卷76 顧	衆吳郡吳縣	「刺史華歆辟爲西曹書佐。及 軼敗(311・6)、惺惺軼子 經年、會赦(312・9)乃出、 元帝以爲參軍」	『晉書』卷76 『晉書』卷71	
羊陳	曼泰山南城	歷陽内史參軍より行參軍(法・兵二曹)	『晉書』卷49 『晉書』卷71 周	訪廬江尋陽	叔父陶侃は舊成將軍	『晉書』卷58 『晉書』卷66 『晉書』卷68	
	穎陳國苦縣		沈	孫廬江尋陽	賀循傳に參軍沈嶺とあり、沈	沈充傳と卷98	
				嶺吳興武康	充傳に「鄉人沈嶺嶺充」	沈充傳	

			沈 陵吳興武康「太傅東海王越勝爲從事，元『宋書』卷100帝之爲鎮東將軍，命參軍事。自序徐機作亂，殺吳興太守袁粲，陵討平之。」		
掾 屬	庾 亮	穎川鄢陵		『晉書』卷73	
出 簿	孔 夷 吾 魯	國	「元帝以爲主簿，轉參軍」鎮東府？	『晉書』卷91	

次の從事中郎は、公府の長史・司馬とともに六品官である。從事中郎は、前漢以來大將軍府で謀議に参ずる幕僚であり、魏晉時代には、その参謀的性格から記室を兼領した。⁽³¹⁾ もともと公府の諸曹を司ったのは掾屬であった。その掾屬の上に、八王の亂の頃から参軍が急激に増加し、参軍が掾屬の上で各曹を掌るようになる。今、鎮東府では、その参軍の上に、より高い從事中郎がかぶせられる。『宋書』卷三九百官志上に

晉元帝、鎮東大將軍及び丞相と爲り、從事中郎を置く。定員無し。諸曹を分掌し、錄事中郎・度支中郎・三兵中郎有り。

とある。その諸曹分掌の例として、後の丞相府のことではあるが、丞相司直の劉隗は或る疏のなかで、「從事中郎周延、法曹参軍劉胤、屬李匡」を、刑罰失宜の責任を問ひ、免官を要請している。⁽³²⁾ この周延は法曹中郎であろう。鎮東府の從事中郎には、選舉を掌る下臺、記室を掌る諸葛恢がみえる。

鎮東府の從事中郎のほとんどは北人によって占められている。なぜ、ほかの創業王朝の幕府には見られない從事中郎による諸曹参軍の分掌が、琅邪王の鎮東府において實施されたのであろうか。そうせざるをえない事情が琅邪王の鎮東府にあったのであろう。わたくしはそれこそ、南人主導の安東府から北人優位の鎮東府にかえる目的で案出された便法であったと考える。西晉の貴族社會において江南人士の占める位置は低いものであった。彼らの多くははじめ秀才孝廉に擧げら

れ、郷品四品を與えられるのが一般的であった。故に郷品三品の者の官である從事中郎に、南人が就任することはたやすいことではなからう。しかし、高品の北來士人が南下してくると、彼らを幕下に入れ、從事中郎に任命し、府務を掌る二四曹參軍の上に置くことによって、北人は鎮東府の實權を握ることに成功する。もちろん洛陽が落ち、琅邪王の都督府の仕事が非常に重要になり、府務が重きを加えた、ということもあらう。しかし、その方法が南人の上に据える形を取ったのが問題である。つまり、無定員の軍諮祭酒と從事中郎を北來士人の流入プールとして利用し、安東府で南人主導の政權の樹立に期待を抱いて協力を惜しまなかったはずの南人を、北人は郷品を武器として、上から押さえつけたのである。

したがって、琅邪王の鎮東府は、參謀部としての軍諮祭酒と、最高執行部としての從事中郎を、北人で獨占した。それによって、「中國の官を亡い、守りを失いし士の、亂を避けて來たれる者は、多く顯位に居て」「王業を佐佑し」「吳人を駕御し、吳人頗る怨む⁽³³⁾」という形勢がほゞできあがった。そのほかの鎮東府の參軍と掾屬にも、北來士人が増加したのは言うまでもない。特に選舉を掌る西曹掾には庾亮が任命されるなど、要職は北人によって占められる。

では、南人はなぜそうした北人の横暴に近い措置を受け入れたのであろうか。それにはいろいろな理由が考えられるが、まずは、洛陽が落ちたことに對する不安の高まりがあったと思われる。特に匈奴から離れ、河淮地域に自立を目指している石勒が、死んだ東海王越の軍を追ひ、その軍勢二十萬を虐殺し、その勢いを以て葛陂（豫州新蔡）に壘を築き、江南への大舉南侵を企圖する。琅邪王は三十二年鎮東長史の紀瞻を都督となし、戒嚴態勢にはいる。たまたまの大雨で大事には至らず、石勒は北歸するが、この事件が南人をして異民族の脅威を實感せしめたのは十分想像できるであらう。いわば、南人は最悪の状態になることを恐れ、それを想定して現状を受け入れる途を選んだのであろう。

ところが、鎮東府が新たに南人佐僚を招致したことも、南人が北人優位の現状を受け入れた一因になる。三十一年一月壽春の都督・周馥は敗死したが、江州刺史の華軼は、壽春の監督下にあるという理由で、琅邪王の敎命に従わなかった。そこで、琅邪王はその年六月、揚州刺史の王敦と丹楊の甘卓らを遣わし、華軼を討ち亡ぼす⁽³⁴⁾。この周馥と華軼の相次ぐ敗

死によって、その麾下にあった江淮地域の南人豪族が次々と琅邪王の鎮東府に加わる。また中原で活躍していた南人も續々と歸郷し、鎮東府に召される。

まず、廣陵の南人の望と稱せられた戴若思が右司馬となり、同郡の華譚は軍諮祭酒となる。戴若思の弟の邈は華譚の女婿で、兩家は通婚しており、戴邈ものち丞相府の軍諮祭酒になる。廣陵の代表的な望族である彼らの祖父は、みな孫吳の時、左將軍として名をとどめている。⁽³⁵⁾ 華譚は、九州の秀才孝廉のうち彼の對策に遠ぶものは無かったと稱された才學の士である。同じく戴邈も好學の士で、江南の草創期に學校を立てることを上疏し、それによつてはじめて江南に禮學が修められたという。またもう一人の廣陵の高惲は、もと華軼の西曹書佐で、華軼の敗死後、軼の子をかくまっていたが、大赦にあい、琅邪王の參軍に辟召される。

次に廬江の人としては、武將周訪とその姻親である陶侃の從子の臻が參軍に任命される。特に、東晉最強の武將の名を残した陶侃は、もと華軼の麾下で活躍したが、從子の臻が華軼との質任關係を絶ち、琅邪王のもとへ走り、參軍に任命されたので、陶侃もあらたに琅邪王から奮威將軍に命じられる。陶侃と周訪は、淮南の趙誘と共に、揚州刺史・都督征討諸軍事の王敦に従い、流民と土着民とが對立し泥沼の状態にある荊江地域の諸反亂の鎮壓に乗り出す。

これら廣陵・淮南・廬江の江淮地域は、中原の混亂の影響を直接に受ける不安定な地帯ではあるが、地味ゆたかであり、漕運などによる經濟的な要地でもある。特に江淮運河の最大の幹線である邗溝は、廣陵度支の官にいた先述の陳敏によつて中潁水西道の漕運路が改修され、⁽³⁶⁾ 華北から避難してくる流民の波はおおよそ一旦この附近に集まる。その江南への入口である廣陵は、當時最大の流民がつかけた管陵郡とともに、軍事的經濟的に最も重要な地域であった。その江淮地域の安定を圖る爲に、琅邪王は安東府の時と同じく、廣陵に形成されていた名望家を味方につけたのである。この江淮地域における異民族の侵略と流民の大波の重壓を考えれば、鎮東府において、江淮地域の豪族の入府と相まって行なわれた北來士人の顯位への入府を、江東豪族は認めざるを得なかったのであろう。

一方、琅邪王は新たな軍事力の確保によって、いままで「王略を開復する」ために奔走した義興の周玘を「宗族強盛し、人情の歸する所」であつた爲に憚り、幕下から遠ざける。周玘は今までの勳功の報酬に對する政治的期待とは裏腹に、ついに鎮東府の幕府に召されなかつたので、怨望を懷き、北人の諸執政の誅殺を謀つたが、事前に漏れ、子の颯に「我を殺せし者は諸愴子なり。能く之を復するは、乃ち吾が子なり」と遺言し、三一年六月憤死する。周玘に代わり、義興・周氏と並ぶ江南の豪強である吳興・沈氏の沈頊と沈陵が、東海王越の幕下から鎮東府參軍に辟召される。

以上の如く、琅邪王の鎮東府は、洛陽の陷落に遇つて南渡してきた北來貴族の流入パイプとして、軍諮祭酒と從事中郎を利用し、南人の上に覆いかぶせる形で、北人優越の體制を作り上げた。それは、琅邪王の都督の管轄が江北に及ぶにつれて、江淮地域の豪族が新たに鎮東府に加わつた時期の諸情勢と關わつていた。この新たな軍事力の確保によって、琅邪王はいままでその武力に依存していた義興の武強豪族を遠ざけ、北人優位の文人貴族體制をよみがえらせつつあつた。

3 丞相・大都督府

【建興元年（三一二）五月—建興三年（三一五）一月 左丞相・大都督・督陝東諸軍事

建興三年（三一五）二月—建興五年（三一七）二月 丞相・大都督・督中外諸軍事】

三一年四月、平陽で懷帝が殺害されたとの報を受け、長安で愍帝が即位し、その年五月、琅邪王は左丞相になる。形式だけの長安政府にとつてかわるのは時間の問題にすぎなかつた。その繼位を準備するための丞相府の府僚が次の【表3】である。

流寓王朝としてその基盤が脆弱な琅邪王睿はいろいろな對策を講ずる。まず、丞相府に「四方の士を招延し、多く府僚を辟す。時人は之を百六掾と謂」⁽³⁷⁾つた。すでに北人優位の文人貴族體制を築きつつある琅邪王は、多くの人士を幕下に招く。その府僚のうち江南の人は、いままでの吳會地域、江淮地域の者に限らず、遙か長江中流の長沙の虞望にまで及んで

胡孟康	？	「(郭璞) 行至廬江, 太守胡孟康被丞相召爲軍諮祭酒」とある	『晉書』卷72				
諸祭酒	(顏含)	琅邪臨沂丞相東閣祭酒	『晉書』卷88	丁杜	潭夷盧江	會稽山陰丞相西閣祭酒・丞相國子祭酒	『晉書』卷78 『晉書』卷91
從事中郎	王祖約	琅邪臨沂太守のち廣武將軍豫章太守へ祖逖の弟。丞相掾より。掌選舉	『晉書』卷76(張)	周圃	丹楊	安東參軍より のち314年舊威將軍吳興内史へ	『晉書』卷76 『晉書』卷58
	(阮孚)	陳留尉氏(不就)のち南渡し, 丞相軍諮祭酒へ	『晉書』卷49	周延	義興陽羨	劉隗傳に従事中郎周延。本傳の黃門侍郎は加官であろう	『晉書』卷58 と卷69劉隗傳
	荀憲	潁川潁陰	『晉書』卷39				
參軍	周劉胤	汝南安成東萊掖縣 劉隗傳によると法曹參軍	『晉書』卷61	陸預	吳郡吳縣	行參軍兼記室	『晉書』卷77 『晉書』卷82
	(庾亮)	潁川鄢陵 鎮東西曹掾より。掌書記	『晉書』卷81	虞愉	會稽山陰	丞相掾より。駱馬都尉・參軍	『晉書』卷78
	蔡護	陳留考城	『晉書』卷73				
	鍾雅	潁川長社 記室參軍。のち振威將軍臨淮内史へ	『晉書』卷70				
	(陳韻)	陳國苦縣 鎮東參軍より。敘事參軍	『晉書』卷71				
		『通鑑』(313)鎮東府にかけるが、『北堂書鈔』所引王隱晉書に建興二年(314)に作る。ちなみに「授爵」は丞相府の事である	『北堂書鈔』卷158				
	桓宣	譙國鉅縣丞相舍人より	『晉書』卷81				
	(劉超)	琅邪臨沂丞相舍人より。行參軍	『晉書』卷70				

掾	王張	嶠	太原晉陽方城	水曹	「初辟元帝丞相府」とあるが、當時貴族の起家官の公府の掾であらう	『晉書』卷75(顧)	洪丹楊句容	鎮東參軍より周訪の子	『晉書』卷76
屬	羊	典彭	泰山南城	送適令(淮南郡)より。中兵屬	『晉書』卷69	撫	義興陽羨	司馬承傳に「前丞相掾咸望」とある。恥而不應	『晉書』卷72
	劉桓	辨	龍亢	『晉書』卷74	虞	望長	沙	『晉書』卷58	『晉書』卷58
主簿	(羊曼)	泰山南城	鎮東參軍より。「奏以機密」	『晉書』卷49	熊	遠	豫章南昌	のち參軍さらに從事中郎へ	『晉書』卷71
國					王	陸	陸	琅邪國侍郎	と卷30刑法志
									『晉書』卷71

いる。この「百六掾」の数は、司馬炎の相國府の三〇餘人の三倍にもなるものである。⁽³⁸⁾ また、琅邪王はその府僚を悉く爵位に封ずる。⁽³⁹⁾

一方、義興の周玘の死後、危険を豫知していた琅邪王は、丞相府の從事中郎に、周玘亡きあと周氏一族の中心となっていた周玘の弟の札や從子の筵を拔擢し、ことさらに重用することも忘れなかった。從事中郎は郷品三品の者が就くべき官であるのに、⁽⁴⁰⁾ 鎮東府・丞相府の從事中郎の中、周札のみが孝廉・郎中の郷品四品であり、しかも「性は貪財好色にして、惟だ業産を以て務めと爲し」たという。そのことから特別な意味のあるのが窺われる。周筵の場合は「卓犖にして才幹あり」と言われた人で、起家官は知ることができないが、恐らく彼は丞相從事中郎⁽⁴¹⁾ (六品)に就く資格はあったのであらう。その從事中郎に加えられた五品の黃門侍郎は優遇の意味の加官であったと思われる。⁽⁴¹⁾ その後、案の定、三十四年十一月、父の遺言を胸にたたんでいた周玘の子の懿が、吳興の功曹・徐馥と共に謀し、叔父の周札を盟主に戴いて謀反を起すと、孫皓の族人の弼は、廣德(宣城郡)で合勢する。その時、江南の「豪俠、亂を樂^もう者は翕然として之に附」いたとい

う。しかし、すでに要職に就いている周札が應じなかったので、繆は敢えて兵を發せず、そのうち、琅邪王は王導の計に従い、周筵と吳興の沈陵を投入し、簡単にその亂をかたづけける。その後も、琅邪王は「周氏奕世の豪望にして、吳人の宗とする所たるを以て、故に窮治せず、之を撫すること舊の如し」と、その不安要因を溫存したままであった。

ここで、周繆・徐馥の亂の據點に注目してみよう。義興・吳興・宣城は、文人貴族體制を推し進めている建康政府によって、江南の丹楊・吳・會稽から分離された地域である。吳から西晉にかけて急成長した吳興の代表的な豪族たち、つまり江南最強の豪族周氏、江南の財閥の沈氏⁽⁴²⁾、武強豪俠の錢氏らは、西晉末東晉初の江南の混亂した政局に、常に顔を出している不氣味な存在であった。⁽⁴³⁾彼ら新興豪族の後ろには無數の吳興・義興・宣城の武弁豪俠が彼らの動きを注視していたはずである。東晉政權の行方は、彼らの出方の如何に掛かっていたとも言える。その難題に、老獪な王導は、吳・會稽・丹楊の先進地域をこの後進地域と分離させたうえ、先進地域を味方に付け、後進地域については武強豪族の首領格である周氏の力によって、この地域の亂を鎮壓する作戰に出た。しかし、江淮地域の新しい兵力源を得るようになると、周氏を見捨てる一方、高官を餌に周氏一族の結束を妨げたのである。

特に、吳興地域については、諸反亂を鎮壓する時は勿論のこと、反亂鎮壓後の動搖しがちな時にも、常に周氏の威恵に頼って鎮めている。琅邪王の渡江初めの錢璦の亂後は、吳興の太守に周玘を、周繆・徐馥の亂の後は周札を、その後は周筵を用いて、この地の安定を取り戻していった。つまるところ、王導の極めて優れた政治感覚が、官職を最大の餌として、後進地域の首領格である義興の周氏一族を疎隔したり懐柔したりしながら、北人の思うがままに操り、後進地域を治めていたのである。

一方、三一五年一月、周繆の亂の失敗後、吳興の豪族である沈充と錢鳳らは、自分たちだけの力ではもはや吳會地域、江淮地域を味方につけた建康勢力に對抗できないことを知り、三一五年八月、江南の六州都督・江州刺史になった王敦のもとに走る。彼らは軍閥王敦の參軍となり、「王敦に不臣の心有るを知り、因って邪説を進め、遂に相い朋構し、専ら威權

を弄び、言は禍福を成⁽⁴⁴⁾したという。のち彼らに扇動されて王敦が亂を起こした際、武強豪族の内部に軋轢があつたにもかかわらず、義興の周札をはじめ、前述の後進地域すべてが反亂側についたのも當然の結果であつたろう。⁽⁴⁵⁾

つぎに、丞相府の北人を見る前に、琅邪の王氏に目を向けてみよう。外征を専ら擔つていた王敦は、三一五年、苦勞の末、ようやく荊江地域の流民反亂の鎮壓に成功し、鎮東大將軍・都督江揚荊湘交廣六州諸軍事・江州刺史へ昇進する。ついで、これまですべての軍謀を練りあげてきた琅邪王の謀主王導は、右將軍・揚州刺史・監江南諸軍事となつて出鎮し、王導の従弟の廩は寧遠將軍・荊州刺史となる。また王舒は、東中郎將・司馬紹⁽⁴⁶⁾（明帝）の司馬となり、王敦の兄の含は南中郎將となる。主な軍權はすべて琅邪の王氏に歸し、「王と馬と天下を共にす」といわれた。これ以後、東晉では北來名門の一族が州鎮を獨り占めする風が生まれる。

その頃、丞相府の北人には新たな變化があらわれる。華北からの様々な自衛集團——塢主・行主——或はそれと關係を持つ人々が加わるのである。その代表的な存在が范陽の祖逖である。三一三年、祖逖が親黨數百家と共に京口に達すると、琅邪王は彼を軍諮祭酒に迎え入れる。間もなく彼は社稷の振復を志し、豫州刺史となり、再び北上し、北方の諸塢主を統屬し、石勒の南下を黄河の線で阻止する。祖逖の兄の納は軍諮祭酒に、特に弟の約は府僚のうち最も重要な職である選舉を掌る從事中郎になる。また冀州の樂陵厭次に郷黨や宗族と屯し孤軍奮鬪していた邵續は、三一四年琅邪王より平原内史、のち冀州刺史に任命される。續の女婿の劉遐は河濟間に衆を集めて南下し、三一六年平原内史になる。邵續の使者として建康に至つた劉胤は、丞相府の參軍になる。また三一三年魯の嶧山の塢主である都鑒は兗州刺史になり、青州の長廣の本郡に數千家と共に屯聚していた蘇峻も、安集將軍に任命され、のち南渡して廣陵に到る。

魏晉最高の名族である潁川の荀氏の動向を見てみよう。洛陽が陷落すると、司空の荀藩は「琅邪王睿を推戴し盟主とせよ」という檄を天下に飛ばし、琅邪王をもりたてる。しばらくして、懷帝の死をうけ、藩の甥である愍帝が長安で即位すると、開封に行臺を設け、一帯の諸勢力を督攝する。弟の組を領司隸校尉・行豫州刺史に、族子の崧を都督荊州江北諸軍

事にし、形式だけの北方政權と、江南政權を結ぶ中間的役割を果たす。⁽⁴⁷⁾ その荀藩の子の遷と闕が丞相府に招かれて軍諮祭酒になる。以上の如く様々な華北の集團が丞相府の統屬を受けると、琅邪王はこれまで全面的に依存していた琅邪の王氏の軍事指揮權のほかに、さらに新たな北人の幅廣い支援を得るようになる。

この時に到り、琅邪王は華北の諸勢力をバックに、政治紀綱の確立に着手する。その意圖をも含めて構成された丞相府の新しい顔ぶれを次にみよう。

先ず、丞相府の司直に、鎮東府の從事中郎であつた劉隗が任命される。丞相司直は、漢の武帝の時に始まり、長史の上に位し、その權力は司隸校尉を彈劾してやめさせるほどの力があつた。その丞相府の監察を掌る最高の職についた劉隗は、當時の貴族の最も名譽ある起家官祕書郎（六品）を文翰の才によつてかちとつた稀にみる人である。彼は「雅より文史を習い、善く人主の意を求め、帝は深く器として之を遇し」たという。また、左長史の刁協は諸王文學（七品）で起家した。「時に朝廷草創、憲章未だ立たず。朝臣は舊儀に習う者無し。協は久しく中朝に在り、舊事に諳練し、凡そ制度する所、皆協に稟け」たが、彼は「毎に上を崇めて下を抑え、故に王氏の疾む所となり」「然れども力を悉くし心を盡くし、志は匡救に在り、帝は甚だ之を信任し」たという。この二人は當時の貴族たちとは異なり政務を忌避せず、琅邪王の傍らにあつて政治を動かした。

一方、右長史の周顒は、呉が平定された時揚州刺史となり呉人に悦服された周浚の子である。彼は祕書郎で起家し、寛裕・方正・清貧などで海内に重望があつたが、いつも酒に酔い醒日はほとんどなかった、という方外の子である。「風儀ありて性は閑爽」たる南人の司馬の戴若思とともに、清談貴族を代表する南北の望である。丞相・琅邪王の最高幕僚である彼ら四人の存在が何を意味したのであろうか。

その頃、琅邪王は新しい政治方針を打ち出す。

（阮孚）亂を避けて江を渡る。元帝以て安東參軍と爲す。蓬髮して酒を飲み、王務を以て心に嬰す。時に帝、既に申

韓を用い以て世を救う。而れども孚が徒末だ棄る能わざるなり。然りと雖も事を以て之を任處せず（『晉書』卷四九阮孚傳）。

また

時に帝、方に刑法を任^もい、韓子を以て皇太子に賜う。（庾）亮諫めて以えらく、申韓は刻薄にして化を傷^{やぶ}る。聖心を留むるに足らずと。太子甚だ納る（『晉書』卷七三庾亮傳）。

とあるように、琅邪王の新たな方針とは法術主義の採擇である。それは西晉の寛厚の政術が來した弊害から、官界を肅正し、「豪強を排抑」するためのものであつた。⁽⁴⁸⁾

その推進者が「刑法を以て委ねられ」た司直（三一七年晉王の時には御史中丞）劉隗である。その法術主義はどのように行われたのであろうか。それについては、劉隗傳に丞相司直としての幾つかの糾彈がみえる。その内容は主に二つの點からなっている。一つは、喪中に婚禮及び宴會などを行った者に對する彈劾である。⁽⁴⁹⁾それは放達を慕うことによつて自淨力を失っている貴族社會に、清談派から俗物視されている清議、即ち儒教的綱紀を確立することである。もう一つは、職務の遺棄及び過失に對する彈劾である。⁽⁵⁰⁾實務を忌避する放漫な貴族の勤務態度に對して、政務の能率化を圖ることである。それによつて政治の紀綱改革を目指したのである。その彈劾を被った人は、琅邪の王氏を筆頭に、南北貴族を問わずあまねく及んでいる。しかし、琅邪王は彼ら貴族をみな許したので、衆怨はすべて劉隗に歸したという。

なお、阮孚のような放達浮華派の弊害に關しては、清談の領袖であつた王衍の死を前にしての「嗚呼、吾が曹故人に如かずと雖も、向に若し浮虛を祖尙せず、力を勦^あせて以て天下を匡さば、猶今日に至らざる可し」⁽⁵¹⁾という自責、錄事參軍の陳頤の書、干寶の晉紀總論（『文選』卷四九）など至るところに見える。

では、琅邪王はなぜこうした多くの進言にもかかわらず、阮孚のような放達浮華の人々を切り捨てられず、彈劾された貴族たちを不問に付したのであろうか。實際これまで、琅邪王は北來貴族の政治的能力と名聲に負い、その既得權を全面

的に認めることによって、江南に政權を立てることができた。その間、清談社交界の北來貴族同士は八達・八伯などと呼ばれる鞏固なグループを政界の上層部に築いていた。その清談貴族の代表的な存在である王敦が、建康政府から締め出された江南の武強豪族を麾下にいれ、軍權を握っていたので、琅邪王の地位は安定していたと言いがたい。⁽⁵³⁾故に琅邪王の法術政策はデモンストレーションにとどまらざるをえなかったたのであろう。そこで、琅邪の王氏を頂點とする北來清談貴族界を認めながら、一方では刑法を用いて官僚の綱紀を確立し、君臣の分を定めようとする兩面政策を取った。その琅邪王の法術主義と貴族主義を體現するのが、先の四人の幕僚であったと考える。

琅邪王が法術主義を用いたのは、もとより王敦勢力を牽制するのが目的であったのかもしれない。しかし我々は、琅邪王のこのような意圖とは別の意味で、かの法術主義を支持する層があったことを見逃してはなるまい。その貴重な資料が、丁度この三一七年に、丞相掾であった葛洪によって書かれた『抱朴子』外篇である。「至醇は既に三代に澆れ、大樸は又秦漢に散ず。道は疇昔に衰え、俗は當今に薄し」「姦黨實に繁きに、而も違うるを彈すの制を厳しくせざる者は、未だ其の長生の福を見ざるなり」と言い、刑を用いざるをえぬ時代になったとして、用刑篇を設けているのは注目に値する。「世人は申韓の實事を薄んじ、老莊の誕談を嘉す。然り而して政を爲すに能く刑を錯く莫し。人を殺す者は其の死を原し、人を傷つくる者は其の罪を赦せば、所謂土梓瓦甃（つちのはち、かわらのきりみ）、朝飢を救う無き者なり。道家の言、高きことは則ち高し。これを用うれば則ち弊れ、遼落迂濶す」とあり、空論に過ぎない輿論と現状とのかけ離れを鋭く指摘する。さらに彼が、「然らば則ち刑の物爲るや、國の神器なり。君の自ら執る所にして、人に假す可からず。猶長劍は倒し捉う可からず、巨魚は淵より脱す可からざるがごとし。乃ち崇替の由る所、安危の源本なり。田常の齊を奪い、六卿の晉を分ち、趙高の秦を弑し、王莽の漢を篡いしは、霜を履みて冰に逮び、由來漸あり。或は海濱に永歎し、或は心を望夷に拊ち、禍は宗祧に延ぶ。戒を將來に作す者は、虚名を往古に慕いて、實禍を當已に忘るるに由るなり」と、君主に刑罰を敢行するように促しているこのくだりは、琅邪王と王敦との關係を強く意識してはいまいか。

從來、儒家に屬する『抱朴子』外篇に何故に用刑篇があるのか、疑問視されてきた。それは背景になっている琅邪王の丞相府に於ける法術政策を考慮に入れてはじめて理解されるであろう。丞相府でやかましく議論されていた用刑政策に對するこうした葛洪の見解は、『抱朴子』の他の社會批判の内容もそうであるように、彼の置かれていた江南の中小豪族という位置と深く關連している。⁽⁵⁴⁾その意味で、寒門の士の傳『晉書』卷七一が設けられているのは注目すべきことである。祖父がもと蒼頭であつた豫章の熊遠は主簿から從事中郎に、「孤寒を以て、數しは奏議有りて」朝士から嫌われた陳國の陳頴は、鎮東府法曹參軍から司察の事を掌る錄事參軍になる。彼ら寒門が元帝に重用され、政治改革に意欲をみせているのは、葛洪の主張と軌を一にするであろう。つまり、すでに北來貴族と江南の吳・會稽豪族とが連合して門閥を形成し、帝權に掣肘を加えている。その貴族階級から取り残されている南北の寒門の士が、強力な君主政治によって、現實社會の救済と政界への擡頭を實現しようとしたのは、當然の歸結であろう。この琅邪王の法術を用いる政策によって、これまでの南・北人の問題は、さらに君主權と貴族と寒門の問題へ擴大されてゆく。

以上の如く、琅邪王の丞相府は、南人の地域的分斷作戰の成功と、新たに北方から諸集團が府僚に加わつたことを契機に、南北寒門層の支持を得て、官紀の刷新を圖り出した時期に組織された。その政治改革は水面下に、琅邪王と王敦との對立の要因を潜めたものであつた。

三 東晉の成立と王敦の亂

三一七年三月長安が陥落し、續いて三一八年愍帝が劉聰に殺されると、表面的には北方守護の諸將の勸進が大きく働いて、琅邪王睿は晉王から皇帝の位につき、丞相府の僚佐を中心に百官を備える。

東晉成立の最高の立て役者である王導は驃騎大將軍・都督中外諸軍事・揚州刺史・領中書監・錄尚書事となり、王敦は大將軍・都督江揚荊湘交廣六州諸軍事・江州牧となり、兩者が内外の實權を掌握する。一方、丞相府の府僚は、概ね司馬

と軍諮祭酒は將軍・刺史に、從事中郎と記室參軍は近侍の官に、長史と參軍は尚書省の官に任じられる。特に「時に、帝以えらく侍中皆北士なり、宜しく南人を兼用すべし」と。(陸)曄、清貞を以て著稱せられ、遂に侍中に拜せられ⁽⁵⁵⁾たとあ

るように、當時、侍中をはじめとする尚書・門下・中書省の要職と主な都督は、北人によって獨占された。なお職務のない僚屬は、定員のない三都尉に充てられた。參軍は奉車都尉に、掾屬は駙馬都尉に、行參軍と舍人は騎都尉に命じられ、朝會請召を奉ずる奉朝請(六品)の官が加えられた。このような冗散官は以後省官併職の大きな課題を残す。⁽⁵⁶⁾

さて、元帝は皇帝の位に即くと、皇帝という權威をもって、從來の法術主義をより闡明にして帝權の伸長を目論む。それは如何に行われたのであろうか。

『晉書』卷六元帝紀の史臣曰くの條に「布の帳、練の帷(恭儉の德―筆者註)、刑を詳らかにして化を簡にし、前軌を抑揚し、中興を光啓す」とあり、刑政に意を用いたのは確かであろう。元帝の刑法主義は、特に地方官の職務を重視する施策から着手している。その腹心は侍中の劉隗と尚書令の刁協である。太興元年(三一八)七月の詔に

二千石令長は當に祗んで舊憲を奉じ、身を正し法を明らかにし、豪強を抑齊し、孤獨を存恤し、戸口を隱實し、農桑を勸課すべし。州牧刺史は當に互相に檢察し、私を顧みて公を虧なうことを得ざるべし。長吏、志奉公に在るも而も進用されざる者有り。貪穢穢濁にして而も財勢を以て自ら安んずる者有り。若し有りて擧げずんば、當に故に縱し^{こしやう}善を蔽うの罪を受くべし。有りて知らずんば、當に闇塞の責を受くべし。各おの明愼に奉行せよ(『晉書』卷六元帝紀)。とあり、地方官の役割に大きな比重を置いている。並行して官僚に嚴しい刑罰を適用する。汪藻の『世說新語』考異』言語篇・元帝始過江の條・敬胤(齊・梁間の人)注に

(元帝)法を以て下を御し、黜陟を明らかにす。宋典、上の親しむ所なり。其の人法を犯す。典の官を免じ(もと官典に作るが、當に典官に作るべし―筆者註)、其の司馬を斬りて以て徇す。桂陽太守程甫、王敦の私する所なり。奢侈度を踰ゆ。上、御史戴弘をして車檻を遣わし、之を斬らしむ。永康令胡毋崇、百姓を侵横し、罪を懼れて亡叛し、既に歸首

す。朱雀門に頓せしめ鞭うつこと二百、除名して民と爲す。徐州刺史蔡豹、征伐するに律に違う。斬りて之を磔す。⁽⁵⁷⁾とある。現行の『晉書』には卷八一に蔡豹の事例(三〇年)のみが残っている。また宋典は、先の蕩陰の役で元帝を助けた従者である。かかる當時の刑獄の繁興に對して、著作郎の郭璞は二回に亘つて上疏し、先には「道に^よ杖るの情未だ著れず、而るに刑に任ずるの風先に彰る。經國の略は未だ震わず、而るに軌物の迹屢しば遷る」と論じ、後には大赦を行ふべきであると諫める。⁽⁵⁸⁾

元帝が實施した地方官重視策及びその嚴罰政策も、葛洪の『抱朴子』の審舉編にみえる。彼は特に現任官のうち貪濁贓汙の罪を犯した者は赦免にあつても禁錮終身すべきであると主張している。なお、このような元帝の施策にともなつて、才能を備えた寒門が要職に取り立てられる。熊遠は御史中丞、陳頤は尙書、高悝は丹楊尹の顯位についている。もちろん彼らは君主政治を理想とするが、君主の嬖倖でもなければ御近でもない。⁽⁵⁹⁾彼ら寒門層は一部の貴族に壟斷されている官僚機構の正常な運営を、即ち貴族政治から官僚政治への期待を元帝に寄せたのである。彼らは貴族の浮華の弊を攻撃する一方、元帝の不當な措置に奏議することためらわなかつた。御史中丞の熊遠は元帝の御近である尙書令の刁協を彈劾し、白衣領職させている。⁽⁶⁰⁾

さて、元帝の實施した法術政策が、客觀的規定としての法によるものでないことは、刑法志の熊遠らの「朝廷草創、議斷法律に循わず。人は異議を立て、高下の狀無し」という上書をみれば明らかである。元帝の刑法を用いる政策は、豪強の專横を押え、帝權の根本を固めようとする、あくまでも「權宜從事」策であつた。⁽⁶¹⁾このような用刑政策には帝權の獨走を招く危険が潜んでいるだろう。皇帝の權威をかさにきた劉隗と刁協の專横、弄法の吏による失理の獄、⁽⁶²⁾一般庶民に對する「役の確保」の爲の嚴しい刑罰の適用など、用刑政策に對する非難の聲が高まる。

しかし、このような刑法政策が貴族層にまで貫徹されたとは考えにくい。それは熊遠の上疏に「今、朝廷の法吏、多く寒賤より出づ。是を以て章書日に奏すれども、以て物を懲らしむるに足らず。官人は才を選べども、以て事を濟すに足ら

ず⁽⁶⁴⁾とあり、法を用いても權貴に及ばぬことを改めるべきであると述べている。一方、軍權を握り、荊江に盤踞している琅邪の王敦は三二〇年武陵内史の向碩を擅殺する⁽⁶⁵⁾。このような王敦をはじめとする貴族の壁に對して、焦った元帝は一氣に帝權を強化せんとし、軍事對決に出たため、三二二年王敦の亂を引き起こしてしまったのである。ここでは王敦の亂の顛末については詳述を控える⁽⁶⁶⁾。

王敦の一次舉兵の際、建康貴族はそれを默認する。元帝は、その時華北の諸自衛集團を導入することは考えず、奴客を解放して急遽編成した軍隊を以て對決したものの、王敦の軍の前に總崩れになってしまい、帝側の臣の死とともに、帝權は地に墮ちる。その際、はつきり割り切れないとしても、南人は各々の思惑によって、おおよそ江南の先進地域である吳・會稽豪族は建康貴族側に、後進地域である吳興豪族らは王敦側についた。ただし、指摘しておかねばならぬことは、多くの寒門が元帝側について死んでいた、という事實である。湘州刺史の宗室・司馬承とともに死んだ「忠義傳」の多くの湘州豪族がそうであり、丹楊の人である梁州刺史の甘卓と樂道融と許朝もまたそうである⁽⁶⁷⁾。彼らの中に丹楊の豪族が多いのは、先述の先進地域の中、丹楊が、吳・會稽に比べて比較的開發が遅れ、中小豪族の寒門層が多かったことも關係があるだろう。しかし、東晉初期の彼ら寒門の存在はあまりにも微微たるものであった。彼らが東晉史の前面に登場するまでには、しばらく江南の發展を待たねばならない。

その後王敦の二次舉兵の際、建康貴族層は北方の塙主と吳・會稽豪族の力に頼り、吳興の武強豪族の勢力をはね除け、彼らは自己保存に成功する。しかし、東晉初期の建康貴族は、南朝の貴族に比べると、私欲に走ることなく、政治にも進んで意欲をみせたので、東晉初期の混亂の後には貴族の首領格である王導を中心として、政治的安定期にはいる⁽⁶⁸⁾。

おわりに

以上、從來あまり關心が持たれなかった、元帝の府僚を通して、東晉の成立過程を論じてみた。東晉政權はわずかの

吳・會稽豪族を抱き込んだ北人が、上から南人を押えつける體制であった。

琅邪王睿と王導らは、江南豪族の情勢判断の誤りにつけこみ、渡江初期の安東府では、全面的に江南豪族の力に頼り、江南政權としての基礎を固めた。琅邪王の都督の統轄範圍が江淮流域に及んだ鎮東府で、北來貴族は府僚體制を巧みに利用し、南人の上に座る。その後、丞相府の頃から、司馬氏の傳統的權威に頼って華北の諸集團が琅邪王の統屬を受けるようになる。琅邪王は琅邪の王氏をはじめとする貴族の綱紀を改め、帝權を強化せんとし、寒門層に支持され、法術主義を用いる。建康貴族は、さらに軍閥王敦の亂を経て、帝權と武強豪族をはねのけ、南北の貴族連合體制を作り上げる。

東晉の成立過程は、江東の一部豪族の協力を基盤とした北來貴族の政治力と司馬氏の皇帝という傳統的權威の合作であった。その政治力とは、郷品による官僚體制——それは皇帝權をもってしても、勝手に左右できない社會的契約と化したものである——を最大の武器とした南人の籠絡であった。郷論を武器とする北人の前に、南人は四分五裂し、無慘にも崩れていった。當時の江南に幅廣い中小豪族層、即ち文人寒門層が存在したならば、南朝貴族制は異なった體制になったかもしれない。その僅かの寒門層も、東晉初期以後は中央政府の顯位から閉ざされてしまう。

東晉貴族制の重荷をひとり背負わなければならなかった吳・會稽豪族のその後の動向は、自ら重要な意味を持つだろう。なお王敦の亂を鎮壓した明帝死後、續く幼帝の治下で、貴族は固定化し、寒門は記録の上から消える。一方、荊州地域は東晉の成立事情からして建康貴族層に組み入れられなかった。そうした様々な社會的不滿を擔った東晉中期の軍閥桓玄と、その後變質していった建康政府との衝突については、南朝における州鎮體制の變貌という觀點から、今後考察してゆきたい。

註

(1) 岡崎文夫「南朝貴族制の起源並びに其成立に至りし迄の經過に就いての若干の考察」『南北朝に於ける社會經濟制度』

(2) 宮崎市定「弘文堂書房、一九三五年」二八二頁。
宮崎市定『大唐帝國——中國の中世——』(世界の歴史7、河

出書房、一九六八年、のち中公文庫、一九八八年に再録）一四四頁。

- (3) 川勝義雄「孫吳政權の崩壊から江南貴族制へ」（以後①論文と稱す）と「東晉貴族制の確立過程―軍事的基礎の問題と関連して―」（以後②論文と稱す）『六朝貴族制社會の研究』（岩波書店、一九八二年）。

- (4) 矢野主税「東晉初頭政權の性格の一考察」『長崎大學學藝學部社會科學論叢』一四、一九六五年。また氏は「東晉における南北人對立問題―その政治的考察―」『東洋史研究』二六―三、一九六七年など上記の一連の研究で「東晉初頭の時代は、江北人士と江南人士が最も融和的であった」とされるが、果してそう言えるだろうか。

ちなみにこのほか、東晉政權の成立に關しては、越智重明「東晉成立に至る過程に就いて」『東洋學報』三三―三・四、一九五四年、陳寅恪「述東晉王導之功業」『陳寅恪先生論文集補編』（九思叢書、一九七七年）をはじめ、南人と北人に關する論文がいくつかある。

- (5) 八王の亂については『晉書』卷五九、並びに福原啓郎「八王の亂の本質」『東洋史研究』四二―三、一九八二年と、「西晉代宗室諸王の特質」『史林』六八―二、一九八五年参照。

- (6) 『晉書』卷六七郝鑒附郝隆傳。

- (7) 『晉書』卷七一孫惠傳。

- (8) 南人の各傳は後の表を参照されたい。

- (9) 『晉書』卷一〇〇陳敏傳。

- (10) 『晉書』卷一〇〇陳敏傳。一方、會稽の賀循は陳敏の官を

固く拒否していた。

- (11) 『晉書』卷六八顧榮傳。

- (12) 『晉書』卷一〇〇陳敏傳。

- (13) 『晉書』卷六一劉喬傳に「河間王顒進（劉）喬鎮東將軍・假節、以其長子祐爲東郡太守、又遣劉弘・劉準・彭城王釋等率兵援喬」とある。

- (14) 王曠については、『晉書』卷四惠帝紀永興二年二月條に、「右將軍陳敏舉兵反、自號楚公。……遂揚州刺史劉機・丹楊太守王曠」とある。また同書卷八〇王羲之傳に「父曠、淮南太守。元帝之過江也、曠首創其議」とあり、詳しくは「太平御覽」卷一八四所引の「語林」に「大將軍・丞相諸人、在此時閉戸共爲謀身之計、王曠世宏來在戸外、諸人不容之、曠乃剔壁闚之曰、天下大亂、諸君欲何所圖謀、將欲告官、遽而內之、遂建江左之策」とある。

- (15) 表の府僚は主に『晉書』を中心に整理したものである。しかし周知のとおり、現行の『晉書』の記述は甚だ相互矛盾するところが多い。ゆえに本傳ばかりでなく、ほかの列傳、「資治通鑑」等と相比べて判斷したものである。それは表の備考欄に簡略に記しておく。

- (16) 『晉書』卷六五王導傳。

- (17) 嚴耕望「中國地方行政制度史上編―卷中・魏晉南北朝地方行政制度」一九〇頁。また『宋書』卷三九百官志上に「長史・從事中郎主吏、司馬主將、主簿・祭酒・舍人主閤內事、參軍・掾屬・令史主諸曹事」とある。

- (18) 宮崎市定『九品官人法の研究』第三章五「軍府僚屬殊に參

軍の發達」参照。

- (19) 主簿と府主との關係については、例えば『晉書』卷五〇郭象傳に「東海王越引爲太傅主簿、甚見親委、遂仕職當權、熏灼内外、由是素論去之」とあり、又同書卷四九阮裕傳に「大將軍王敦命爲主簿、甚被知遇」とある。

- (20) 『建康實錄』卷八孝宗穆皇紀に「許詢字玄度、高陽人。父歸、以琅邪太守隨中宗（元帝—筆者註）過江、遷會稽內史、因家於山陰」とあり、また『晉書』卷六元帝紀太興三年秋七月條に「朕應天符、創基江表、兆庶宅心、繼負子來。琅邪國人在此者近有千戶、今立爲懷德縣、統丹楊郡」とある。

- (21) 宋典については、『晉書』卷六元帝紀に「（成都王）穎先令諸關無得出貴人、帝既至河陽、爲津吏所止。從者宋典後來、以策鞭帝馬而笑曰「舍長、官禁貴人、汝亦被拘邪」吏乃聽過」とある。

- (22) 川勝氏前掲②論文二一五頁。

- (23) 『晉書』卷六五王導傳。なお王敦については『資治通鑑』卷八六晉紀懷帝永嘉元年九月條「考異」参照。しかし王敦が揚州刺史として赴任したのではなく、ほかの州鎮の長官として、朝廷の許可を得て一時役所を離れて、琅邪王を訪問したと考えても差し支えなからう。『晉書』卷六元帝紀に、元帝は安東將軍都督揚州の時、琅邪を訪れたとある。故に有名な諫の行列に、青州刺史（或は中書監）王敦が参加したと考えたい。またその行列には、江南の地方官になっていた北人も加わったのであろう。

- (24) 軍司については、宮川尙志「南北朝の軍主・隊主・戍主等

について」『六朝史研究・政治社會編』（平樂寺書店、一九六五年）参照。魏晉時代の軍司については『金石萃編』卷二五關中侯劉韜墓志の錢大昕跋尾に十八用例をかがけているが、安東將軍琅邪王睿の軍司・顧榮はぬけている。補うべきであろう。なお『通典』卷二九職官監軍條に「宋齊以來此官頗廢、……」とあり、それは宋齊以後貴族が軍事權を失う事とも關係があるだろう。

- (25) 軍諮祭酒については、『宋書』卷三九百官志上に「其參軍則有諮議參軍二人、主諷議事、晉江左初置、因軍諮祭酒也。宋高祖爲相、止置諮議參軍、無定員」とある。なおこの職務について『晉書』卷五二華譚傳に「自登清顯（軍諮祭酒—筆者註）、出入二載、執筆無贊事之功、拾遺無補闕之績、過在納言、闇於舉善、狂寇未賓、復乏謀策。……、謹奉還所假左丞相軍諮祭酒版」とあり、その職の性格をよく窺うことができる。

- (26) 『晉書』卷六八薛兼傳に「（薛）兼清素有器宇、少與同郡紀瞻・廣陵閔鴻・吳郡顧榮・會稽賀循齊名、號爲五儒」とある。ちなみに「齊名」とは、人物評價が同じで、郷品が同じ者である。「齊名」については、矢野主税「狀の研究」『史學雜誌』七六一二、一九六七年参照。

- (27) 『眞誥』については、神塚淑子「眞誥について」上下『名古屋大學教養部紀要』三〇・三一、一九八六・一九八七年参照。

- (28) 川勝氏前掲②論文二一七頁。

- (29) 『晉書』卷五九東海王越傳。

- (30) 『晉書』卷六五王導傳。
- (31) 從事中郎については、『後漢書』志二百官一に「將軍、……長史、司馬皆一人、千石。本注曰司馬主兵、如太尉。從事中郎二人、六百石。本注曰職參謀議。……」とある。記室の兼任の例は、『三國志』卷二八魏書鍾會傳に「以中郎在大將軍府管記室事、爲腹心之任」とあり、また『晉書』卷三九荀勗傳に「……、轉從事中郎、領記室」とある。
- (32) 『晉書』卷六九劉隗傳。
- (33) 『晉書』卷五八周玕・周劭傳。
- (34) 『晉書』卷六一華軼傳に「軼自以受洛京所遣、而爲壽春（都督揚州諸軍事周馥）所督、時洛京尚存、不能祇承元帝敕命、……」とある。
- (35) 『三國志』卷四七吳書吳主傳、『三國志』卷六四吳書孫綝傳註『文士傳』。
- (36) 『晉書』卷一〇〇陳敏傳所引の『水經注』等。また、佐久間吉也『晉代の水利』、『魏晉南北朝水利史研究』（開明書院、一九八〇年）参照。
- (37) 『晉書』卷八九虞裒傳。
- (38) 『宋書』卷三九百官志上に、「相國府掾屬三三人」とある。
- (39) この時の爵位の濫發について『晉書』卷七一陳頊傳に論駁がある。
- (40) 『北堂書鈔』卷六八所引の「鎮東大將軍司馬伯表」に、「從事中郎缺、用第三品。中散大夫河内山簡、清粹履正、才識通濟、品儀第三也」とある。また宮崎市定『九品官人法の研究』一〇九頁と二二六頁参照。

- (41) 『晉書』卷六九劉隗傳に「從事中郎周延」とあり、同書卷五八本傳に「黃門侍郎周延」とあるが、丞相府には黃門侍郎がないはずである。加官として考える方が妥當であろう。
- (42) 『晉書』卷二六食貨志に「吳興沈充又鑄小錢、謂之沈郎錢」とある。
- (43) 吳興の豪族については、大川富士夫「六朝前期の吳興郡の豪族——とくに武康の沈氏をめぐって——」『六朝江南の豪族社會』（雄山閣、一九八七年）参照。
- (44) 『晉書』卷九八沈充傳。なお王敦と錢鳳との関係は、『資治通鑑』卷八九晉紀愍帝建興三年（三一五）八月にはじめて見える。
- (45) 王敦の亂は、謀主の吳興の沈充や錢鳳を中心として、「王敦舉兵攻石頭、（右將軍・都督石頭水陸軍事の義興・周）札開門應敦、故王師敗績」（『晉書』卷五八周札傳）とあり、又「時廣德縣（宣城郡）人周玕爲（錢）鳳起兵攻（宣城內史鍾）雅、……」（『晉書』卷七〇鍾雅傳）とあるように、吳興・義興・宣城の後進地域が反亂側についている。なお、東晉初期の宣城郡は最も東晉側が頭を痛めたところである。例えば『晉書』卷七四桓彝傳に「宣城阻帶山川、頻經變亂、宜得望實居之」とあり、又「以郡兵寡弱、山人易擾、……」とあるように、山越も殘存している。
- なお、吳興豪族内部の軋轢については『晉書』卷五八周札傳参照。
- (46) 『晉書』卷九八王敦傳。
- (47) 潁川荀氏については、丹羽兌子「魏晉時代の名族——荀氏の

人々について―』『中國中世史研究』（中國中世史研究會編、一九七〇年）参照。

(48) 『晉書』卷六九劉隗傳。

(49) 劉隗の彈劾については『晉書』卷六九劉隗傳及び『通典』

卷六〇禮・嘉條參照。主な例は、喪禮を慎まなかった琅邪・王籍之、琅邪・顔含、また喪中に宴會を開いた廬江太守の梁龔とその宴席に参加した周顒ら三〇人が、彈劾されている。

(50) 『晉書』卷六九劉隗傳と卷一〇〇祖約傳參照。主な例は次の通りである。護軍將軍・戴若思は、建康尉の捕らえた護軍の士を、護軍の府將が奪い取った責任を問うて彈劾されている。又南中郎將・王含は、不適格者二〇人を參佐として辟召した罪で彈劾されている。又從事中郎・周延と法曹參軍・劉胤は、刑政の中らず枉殺された督運令史（八品庶人の官）淳于伯の件の責任を問うて、任務にたえざる理由に彈劾されている。又從事中郎・祖約は、家庭内の不和のため職務を遺棄した罪で彈劾されている。又吏部尚書・周顒は、弟・崇の門生が人を傷害した上、更に駆けつけた左尉を斬つたために彈劾されている。

(51) 『晉書』卷四三王衍傳。

(52) 『晉書』卷四九羊曼傳に、兖州八伯（古の八雋に擬した者）とは、阮放・郝鑒・胡毋輔之・卞壘・蔡謨・阮孚・劉綏・羊曼とある。又卷四九光逸傳に、八達（放達浮華派）とは、胡毋輔之・謝鯤・阮放・畢卓・羊曼・桓彝・阮孚・光逸とある。なお宮崎市定『清談』『アシア史研究』第三（同朋舎、一九五七年）参照。

(53) 『晉書』卷六五王導傳に「初、西都覆沒、海内思主、羣臣及四方並勸進於帝。時王氏強盛、有專天下之心、（王）敦憚帝賢明、欲更議所立、（王）導固爭乃止」とある。

(54) 『抱朴子』については、吉川忠夫『抱朴子の世界』上・下

『史林』四七・五・六、一九六四年參照。

(55) 『晉書』卷七陸曄傳。

(56) 『晉書』卷二四職官志。なお省官併職政策については、川合安「桓溫の省官併職政策とその背景」『集刊東洋學』五二、一九八四年參照。

(57) 汪藻の『世說新語』考異は、金澤文庫『世說新語』の後ろに附されている。また唐長孺「王敦之亂與所謂刻碎之政」『魏晉南北朝史論拾遺』（中華書局、一九八三年）參照。

(58) 『晉書』卷七一郭璞傳。

(59) 葛洪も、『抱朴子』で「用刑失理、其危必速、亦猶水火者所以活人、亦所以殺人。存乎能用之、與不能用」（用刑篇）とあるように、刑罰を用いることの慎重さと、また法吏の養成（審舉篇）を主張している。

(60) 『晉書』卷七一熊遠傳、『太平御覽』卷二二六所引の『中興書』參照。

(61) 『晉書』卷三〇刑法志。なお東晉の元帝の法術主義は、魏の曹操のそれとの比較が必要であらう。曹操の法術主義については、岡崎文夫『魏晉南北朝通史』（弘文堂書房、一九三二年）外編第一章第四節・第五節參照。氏は「曹操の法術主義とは、時にとつて宜しきを制する方法を指すのであって、決して客觀的標準を立てて一般秩序を定立する意味合を

もつものではない」とされる。元帝の場合はより消極的なものであろう。

(62) 失理の獄の代表的な例は、『晉書』卷七六張闓傳に見える。

(63) 庶民の役に對する厳しい刑罰は、『晉書』卷三〇刑法志の晉王大理の衛展の上書に見える。

(64) 『晉書』卷七一熊遠傳。

(65) 『晉書』卷六元帝紀太興三年十月條。

(66) 王敦の亂については、川勝氏前掲②論文、唐長孺氏前掲論文、高須國臣「王敦の叛亂について」『愛知大學文學論叢』

三六、一九六九年等參照。

(67) 『晉書』卷八九忠義傳に、湘州の周該・桓雄・韓階・周

崎・易雄等と、丹楊の樂道融が見える。丹楊の許朝は『眞

誥』眞胄世譜に「(許朝)勇猛以氣俠聞、歷爲襄陽・新野・

南陽・潯陽太守。後與甘卓謀討王敦、事覺、卓死、朝自殺。年五十三」とある。

(68) 森三樹三郎「六朝士大夫の性格とその歴史的環境」『六朝

士大夫の精神』(同朋舎、一九八六年)。

(69) 宇都宮清吉「南朝と北朝」『中國古代中世史研究』(創文社、一九七七年)四二七頁。

THE FORMATION OF THE POLITICAL POWER

OF THE EASTERN JIN 東晉

—Concentrating on the Staff Officers of

Si-ma Rui 司馬睿 (Yuan Di 元帝)—

KIM Minsoo

At the start of the fourth century, the northern nobility who sought refuge from the north of China were able to assert their dominance over the indigenous powerful families, south of the Yangtze, and re-establish their aristocracy. Concerning the formation of Eastern Jin 東晉 political power, even though much research has already been done, many points still remain unclear.

The formation of the Eastern Jin can be said to have proceeded in the following way. Firstly, in 307 Si-ma Rui became the An Dong General 安東將軍, then in 311 he became the Zhen Dong General-in-chief 鎮東大將軍 and in 313 got power as the Prime Minister (chengxiang 丞相). Accordingly, this paper will divide the staff officers who served Si-ma Rui into three time periods and analyse these. Through this analysis I intend to investigate how the Eastern Jin political power was created.

As the An Dong General's office that was set up at Jian Kang 建康 in the early days, Si-ma Rui was able to strengthen the foundation of his political power, south of the Yangtze, with the full co-operation of the indigenous powerful families. In his position as the Zhen Dong General-in-chief, through the skillful use of the staff officers system, he was able to establish a literary aristocracy, with the northern nobility occupying a superior position in it. Once he entered the Prime Minister's office, he used the members of the self defence units from northern China as his staff officers and then proceeded to improve the moral of the nobility. This he did with the intention of strengthening the power of the ruler. The various problems that had built up during the formation of the Eastern Jin exploded in the Wang Dun 王敦 rebellion. Thereafter the northern aristocracy political system was complete.